

聖書：士師記15章9～13節

説教：彼らの手に渡す

はじめに

いつものように前回までのあらすじを振り返って
から今日の所を見てまいります。サムソンは、生ま
れる前に主の使いから、「その子はやがてイスラ
エルを救い始める」と告げられていました。ところ
が大きくなるとペリシテ人の女性を妻にしたいと
言いだし、結婚披露宴の席でペリシテ人と仲違い
をしたことから妻は他の男のものになってしまい
ます。これに腹を立てたサムソンはペリシテ人の畑
に火をつけて復讐すると、ペリシテ人もサムソンの
妻を火で焼き殺してしまう。それを知ったサムソン
がペリシテ人に危害を加えるというように、どん
どん問題が大きくなっていった。これが前回まで
のあらすじです。今日の箇所を読んでも、どこに神
の恵みがあるのかと疑問に思います。しかし、聖書
は私たち罪人を救うために書かれた神のことばで
あり、無駄な言葉は一つありません。ここにも
神の救いが示されているはずです。そのことをとも
に探ってまいります。

1 ペリシテ人とユダの人々

1) 彼が我々にしたとおり復讐する

サムソンからたいへんな危害を加えられたペリシ
テ人は、ユダに対して攻撃を仕掛けてきます。なに
も知らないユダの人々が驚いていると、ペリシテ
人はこう答えます。10節後半。「われわれはサム
ソンを縛って、彼がわれわれにしたように、彼に
もしてやるために上って来たのだ。」

復讐の連鎖は止まりません。ちょっとしたボタ
ンの掛け違いから起きたようなトラブルが、いま
やサムソン一人の問題ではなく、ユダの人々を巻き
込む大問題にまで大きくなってしまいました。

2) ユダの人々がサムソンを引き渡す

怒りをあらわにしているペリシテ人に対し、ユ
ダの人々はサムソンを引き渡すかどうか決断を迫ら
れます。判断の要点は二つあります。一つ目。仮に
サムソンが悪いとしても、それをさばくのは誰かで
す。イスラエルは神に選ばれた民で、律法を与えら
れている。イスラエルの律法によってさばくべきで
あるから、サムソンを渡すべきではない。というこ
とになる。しかしそんなきれいな事を言っていられ
ない、切羽詰まったもう一つの事情を抱えてしま
した。それが二つ目の要点。11節の真ん中にこう

あります。「おまえは、ペリシテ人がわれわれの支
配者であることを知らないのか。」いま村は敵の
軍隊で囲まれています。ここでサムソンを渡さなけ
れば、村をめちゃくちやにするという脅迫を受け
ている。それで結局どうしたか。サムソンを二本の
綱で縛り、ペリシテ人に引き渡してしまう。その
とき「われわれは決してお前を殺さない」と言っ
てはいますが、やっていることは、ペリシテ人がお
前を殺してもかまわない。ユダの人々のそういう
身勝手さが見え隠れしています。

2 サムソン

1) エタムの岩の裂け目に逃れた

さて、つぎにこの問題をサムソンの視点から見
ていきましょう。サムソンはこのとき、自分の家では
なくエタムの岩の裂け目に住んでいました。いつ
からそこへ住むようになったのかというと、妻を
火で焼かれたのに腹を立ててペリシテ人に危害を
加えたすぐ後です。これはなにを意味するか。二つ
考えられる。一つ目。サムソンはペリシテ人が復讐
しにやって来るのを予想し、簡単に捕まらないよ
うにこういうところに住んだ。そして二つ目。9節
にもあるように、ペリシテ人が軍隊を出陣させて
ユダの村を包囲するだろうということもサムソンは
あらかじめ予想していた。それで、ほかの人たちに
迷惑が及ばないようにと、村から離れたところ
にあるエタムの岩の裂け目に住んだと考えられる。
自分のことしか考えないサムソンだと思っていた
ら、ユダの人々のこともきちんと考えていた。意
外に思うかもしれませんが、このことはまた最後
に考えたいと思います。

2) 彼らが私にしたとおり復讐した

しかしそんなサムソンの気持ちはユダの人々には
伝わりません。ペリシテ人を怒らせるとはとんで
もない。腹立たしい思いを抱えながら、サムソンに
どうしてこんなことをしたのかと質問する。そうす
るとサムソンはこう答える。「彼らが私にしたとお
り、私は彼らにしたのだ。」確かにサムソンの言葉
にも一理あります。妻の実家を訪ねていったら、サ
ムソンに何の相談もなく妻は他の男のところに嫁
いでいた。それはペリシテ人でさえも腹を立てる
ほどのひどい話でした。畑に火をつけるとか、相
手に危害を加えるとか、やり方が適切であったか

どうか議論は残りますが、すべてサムソンが悪いわけではない。ペリシテ人にも問題があるのです。

3) 従順になる

しかしサムソンの弁明は無視され、判決は最初から決まっていた。サムソンはユダの人々の手によって引き渡されていきます。このときのサムソンは何を思ったでしょう。いくつか想像することができます。一つは、こうなったのも自分の身から出た錯。あきらめてお縄を頂戴しよう。ユダの人々にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。さすがのサムソンも、自分がしてきた罪を自覚し謙遜になったか。そういう面はあるでしょう。

しかしもう一つ考えられる。先ほども触れたように、サムソンは自分がしたことでユダの人々に迷惑がかからないようにと、村から離れたところにあるエタムの岩の裂け目にわざわざ移り住みました。ユダの人々に対してきちんと心配りをしている。自分たちがペリシテ人に支配されているつらさや苦しみを彼も知っているのです。ところがどうですか。確かに自分が騒動の原因ではあるけれど、同胞であるユダの人々が、自分を綱で縛って敵のペリシテ人に引き渡す。なんとも複雑な思いをいだいたのではないか。ところが、意外なことにサムソンは暴れないで、従順になって縛られるままにされていく。いままでのサムソンのイメージとはまったく違います。どうしてだろうかと思議なくらいです。ここだけではなにかを言うことは難しい。

3 イエス・キリスト

1) 引き渡される

その代わり、このサムソンの姿かた私たちはもう一人の方を考えることになります。サムソンは生まれる前に主の使いから「この子はイスラエルを救い始める」と告げられながら、今日のように同胞のユダの人々の手によって敵に売られました。これとほとんど同じような経験をされた方がいます。「イスラエルを救う」と言われながら仲間裏切られ、金で売られて、引き渡された方、イエス・キリストです。二千年前、この方がイスラエルに来られたとき、この方はイスラエルの王になって自分たちを救ってくると信じ、人々は熱狂して迎えました。しかし、今日のサムソンのように抵抗することなく縛られ、祭司長、律法学者たち、当時イスラエルを支配していた権力者によって逮捕され、引き渡されていきました。

2) ゲッセマネの園で

その引き渡されてた場所はどこでしたか。城壁に囲まれたエルサレムの町から出て、少し離れたところにあるゲッセマネの園、そこで逮捕された。なぜそこだったのか。たまたまではありません。サムソンのことからわかります。サムソンが村から離れたところにあったエタムの岩の裂け目に住んだのは、ほかの人たちに迷惑が及ばないようにという配慮からでした。イエスがゲッセマネの園で逮捕されたのも、まったく同じ理由です。裏切る者たちのことを恨むのではなく、彼らが巻き込まれて大変な迷惑をかけないようにと、どこまでも心配してそのようにしてくださったのです。

3) 罪人を救うために弱くなられる

サムソンとイエス・キリスト。最初、この二人にはまったく共通点がないように思っていました。しかし最初にも申したとおり、聖書は罪人を救うために書かれた神のみことばです。あらゆるところに、私たちの罪のことが書かれていると同時に、罪からの救いについて書いてある。士師記13章1節に何と書いてあったか。「イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねて行った。そこで主は四十年間、彼らをペリシテ人の手に渡された。」サムソンはこういう時に生まれてきた。サムソンは、まるで主の目に悪であることを行うイスラエルの代表選手と言ってもいいくらいです。しかし神は、このサムソンを通してイスラエルを救っていくのです。もちろん、ただ乱暴なままのサムソンとしてではありません。今日の箇所にあるとおり、彼も少しずつ変えられていきます。これまで自分のことしか考えない人でしたが、いまは同胞のユダの人々のことも考えられるようになってきます。ユダを救うために無力になって縛られ、ペリシテ人の手に引き渡されていきます。

しかしそれはまだ道の途上です。サムソンはこれから多くの苦しみを通されていきます。最後に彼が無力になったとき、イスラエルを救い始める。力あるときに救うではありません。最も弱くなったときに、主が力を与えて救いのわざを成し遂げる。主の救いとはこのようなことです。

今の時代、力ある者、能力のある者が優れていて価値ある者ともてはやされ、そうでない者は生きる価値がない、と声高に言われるようになってきました。

しかし、聖書は「わたし（神）の力は弱さのうちに完全に現れる」（Ⅱコリ12:9）とあります。十字架の上で、自ら弱さを示してくださった主とともにまた歩んでまいります。

